

音楽による異文化交流の一考察

A Study of Cross Cultural Exchanges Through Music

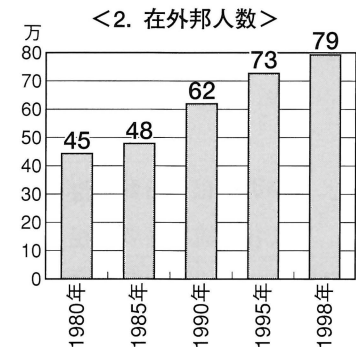
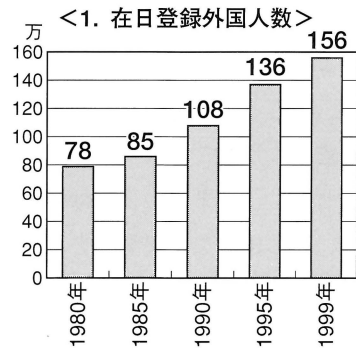
藤原 等 塩田 英樹
Hitoshi FUJIWARA Hideki SHIOTA

I はじめに

近年、右のグラフに見られるように日本に滞在する登録外国人の増加と共に<図1. 外国人登録法に基づいて登録された各年末現在の数>、国外に定住する日本人も益々増えてきている<図2. 日本国籍を有する海外長期滞在者及び永住者>¹。また、交通・通信技術の発達によって、人と物と情報の移動と混交が急速に進み、世界はリアルタイムで結び合わされ、今まで縁の遠かった人々との距離も近くなってきている。それによって今まで気がつかなかった世界が開けてきたという良い面がある一方、今まで古くからある同じような考えで済んでいたものが、生まれ育った環境の相違からコミュニケーションに誤解を生じてきている。

人々の暮らしの仕方は、その自然や社会の環境のなかでそれぞれの生活に応じて長い間にできあがったものであるから、ある社会の人々の特徴的な生活の様式がそれぞれの社会においてさまざまな姿をもっているのは当然のことといえる。しかし今日、在日外国人の約60%が日本語でのやりとり不安を抱えている²という状況の中で、言葉による意思疎通が難しい外国人との間で「コミュニケーションの不足」により人間関係が希薄になり、お互いの間に妙な誤解を生みかねないとも限らない。

異文化に住む人々との交流が重要である事は、新学習指導要領にある「総合的な学習の時間」の学習活動として「国際理解」のカテゴリーが掲げられていることから伺うことができる。そこで本論では、「音楽が人々との交流を進めていく上で有効である」との仮説をもとに、音楽を通した異文化との交流をどのように捉え、どのような点に気をつけていったらよいかを取り上げることにした。それは小倉利丸が「音楽の興味深いところは、非常に鮮明な文化的



な固有性を担っているように見えながら、しかし同時にまたやすやすと文化の境界を乗り越えて、異なる文化の中に伝播しうる力を持っている³と述べているように、音楽には言葉を越えたコミュニケーションを成り立たせる力をもっている、と考えたからである。実際、日本在住外国人児童（小学校）における「教科別理解状況」のアンケート結果では、「よく分かり授業も理解できる」の項目について、音楽（46.0%）が主要4教科（国語・算数・理科・社会）の平均（28.1%）に比べて高いことから、音楽が言葉では理解できないようなことも感覚から伝えられることを示しているといえるだろう⁴。

こうしたことを踏まえ、本論では音楽で実際に交流を進めている例を引きながら、異文化との交流の視点を明らかにし、さらに深い理解を進めていけるよう筆者なりの考察をした。

Ⅱ 異文化交流に必要な視点

よく我々は、考えの違う人に対して「住む世界が違う」などという表現を用いることがあるが、同じところに住んでいても一人一人の生まれ育った環境や、能力、年代の差、性格や役割が違うようにこの世に同じ人は一人としていなく、その存在は異なるものである。

しかし、今までの日本は極端にできる人間や落ちこぼれはつくり、平均的で同じような感性、同じような国民意識をもった人々を教育してきた歴史があった。高度経済成長の取り組みの中で同質的な社会の方がより効率的であるとの考えから、社会の中で異質なものを排除してきた結果が今日の教育におけるさまざまな問題となって現れているに違いない。今後国際化が進み、異文化の問題がますます現れてくる中で、わが国でも異質なものを受け入れながら変らざるを得ない状況が来ていることは確かである。そこでまず、この“異文化”との交流を進めていく際にはどういった視点で臨んでいく必要があるかを考えてみた。

1. 違いの中にある共通性を見出す

“異文化交流に必要な視点”を考える際に鍵となる話が次にある。S. ハンチントンは“独りよがりにならず、互いに周辺の文明と理解し合い共存をしていくためには？”という問いに対して、「“共通則”、つまり各種の文明が『何を共有し』『何を共通項とするか』を探求すべきだ⁵と答えている。実際、「違う」と思われるという事柄でも、よく考えると共通性があったりするものだ。大林太良は、シベリアから北アメリカにかけての針葉樹森林地帯にある一連の文化要素を調査したが、そこではシラカンバの樹皮を材料にしてテントやボート、あるいは容器を作って使用するという習俗、持ち運びに便利な独特のゆりかご、動物の肩甲骨をあぶって行う占い、クマを宗教的に畏れ敬う習俗などがあった。大林は、何も関連性がないように見えるこれらのいろいろな要素が、実際にはこの地方にある特別な交通用具である<雪靴>という同一の文化領域でまとめられると結論づけている⁶。これは、ある文化を自然環境の点から共通点を見出した例であるが、このように文化をさまざまな点から考察することによって今までは気が付かなかった共通点を見出すことができるだろう。

その共通点を歌唱についてみると、例えば日本の音楽を代表する民謡には“ふしまわし”や“こぶし”という表現があるが、これは朝鮮半島の芸能“パンソリ”やモンゴルの部族“タタル”の音楽にもみられ、日本の演歌や追分に類似している⁷。また、ヨーロッパのアルプス、オセアニアのガダルカナル島⁸、アフリカのピグミー族と、地理的にも文化的にも全く違う一見関連性のないようにみえるこれらの地域には、「ヨーデル唱法が用いられている」という共通点がある。器楽について見れば、トルコの「ブラスバンド」、日本・中国・朝鮮半島の「雅楽」、インドの「シタール・タブラなどを中心とした合奏音楽」、インドネシアの「ガムラン音楽」などは別のもののように思われるが、作曲家のみつとみ俊郎は、太鼓の類の打楽器やさまざまな種類の管楽器が大人数で登場することから「その意味では西洋音楽のオーケストラと何ら変わるところはない」とその共通性を示唆している⁹。確かに、HS分類法によれば世界中のすべての楽器は「体鳴」「膜鳴」「弦鳴」「気鳴」「電鳴」の五つの分類のどれかにあてはまると言われており¹⁰、その発音形態の類似点などから他の文化にある楽器と自分達の文化の楽器に親近感をもつ可能性は十分にあるといえる。

音楽の技巧面や形式面の類似性もそうであるが、音楽の表現の中にその共感できる部分を見出す事もできる。三味線（三弦）といえは日本独特の音楽のように聞こえるが、盲目のエレクトーン奏者大島彰は津軽三味線の旋律について「激しい中に、もの悲しい人間の宿命が息づいている。それでいて、辺境の海辺の伸びやかさ、温かさが流れている」とアメリカのソウルジャズ、ポルトガルのファド、スペインのジブシーの歌にも共通する旋律があることを述べている¹¹。近代中国においても多くの日本歌曲が歌い継がれているが、その多くは行進曲風の歌や軍歌で、民衆を喚起し民族精神を奮い立たせるために日本の力強く明快である音楽が群衆の闘志を鼓舞するのに大きな作用を發揮している¹²。

船曳健夫は、異文化理解について“他の文化との比較の中で関連性（共通性）を見出していくこと”という観点から、「異文化を理解する努力というのは、異なる文化をもつ人との重なり合いの部分を広げていくということになります。」¹³と述べている。つまり、異文化の中にある「共通性」を見出すことで親近感が湧き、興味をもったり共感したりする部分、船曳のいう「重なり合う部分」が多くなることだろう。「類は友を呼ぶ」というが、違いの中にある共通性を多く見出していく中で、異文化に対しての親近感が表れもっと「交流してみたい」という気持ちも湧いてくることだろう。

2. 違いから学ぶ

私たちはいつもありきたりの出来事や生活には退屈を覚える現実がある。日本には見られない異国の歴史の中で形成された世界遺産や秘境の地の報道番組などに思わず見入ってしまうように、時にはわれわれの常識（文化・価値観の範囲）では考えられないことに興味をもったりする。A. ストーは「人間は刺激過剰と同じように刺激飢餓に苦しむ。」¹⁴と述べているが、今までとは違う新しい刺激のあるものに興味が行くのは人間の常といえる。それぞれの環境が違う

ように文化は違う事が当たり前といってもよいが、共通点が見出せなくとも、違った価値観や文化と接することで新たな触発を受ける可能性がある。1976年に東京で行われた『アジア伝統芸能の交流』の後では、たくさんの日本の人たちが東南アジアの音楽だけでなく日本音楽を好きになり、「和楽器を習ったり吹きたくなったり」といういろいろな変化が起こっている¹⁵。遠藤克弥が「他文化との接触が長くなれば、異なった文化のよさを感じとるようになるし、自文化の欠点も見えるようになる」¹⁶と述べているように、違った文化にふれることが自分の文化を認識する刺激となり、それが交流の動機付け、きっかけとなることがあるに違いない。例えば、多様な音楽が渦巻いている世界に身を置いているミュージシャンたちにはそうした違った文化から学ぶことが多いようである。津軽三味線をすべての世代に広げようと新しいスタイルを生み出している“吉田兄弟”の弟ケンイチは「どんなジャンルの曲でもかまわない…私が試みようとすることは何でも音楽によい結果をもたらす」と述べ、新しいものに触発されることが好きという¹⁷。更には、ジャズ・フュージョン界のギターリストである渡辺香津美も、クラシック界のギター奏者福田進一との共演によって「自分でも音楽の幅が広がってきた。やっぱり難しいけど面白い。まだまだやりつくすことが多いなという感じで楽しいです。」と、ジャンルの違うものが一緒にやることで学ぶものが多いことを述べている¹⁸。D. エリオットは「未知の音楽文化に触れることは、自己を点検させ、人間関係や考え方の枠組みや好みの再構築を促す」¹⁹と述べているが、これらの例のように異なった文化の音楽に触れることによって、結果的に自分の音楽性を高めて広げていける可能性を伺うことができる。

今まで見たり聞いたりしてきたこととその違いが大きければ大きいほど、印象は強いものとなり斬新な文化が生まれるものになるだろう。吉田禎吾は「文化変容の開始は、文化的に型どられた行動様式からはずれた“逸脱行動”によって始まる」と述べているが²⁰、先の例のように異文化の影響を受けてここに“新しい文化が生まれる”ということがこの論から見て取ることができる。しかしながら、「他と違う」ということは同質性を重んじる社会では異端の存在として考えられるので、今までの価値観に変わるものを取り入れることは勇気のいることである。小澤征爾は「日本人は人のことを気にして、人と違ったことをするのを好まない」反面、「西洋人は個性が強く、創造性が豊かである」と述べているが²¹、日本でもいろいろな価値観の影響を受け変容したものに対して、その個性を認めていくべきである。ある価値観から逸脱するものを“ダメなもの”と決めるのではなく、その存在から何かを学んでいくことが異文化との交流には肝要である。

3. 新たに文化を創り出す

文化の違いはよく考えると共通面があること、また相違点にプラスの面があるということを述べてきた。確かに、歴史や環境とともに形成されてきた異文化はそう簡単に相容れるものではない。しかしながら、文化は人々の移動や時代の流れにより成長、発展をして今日まで存在してきた。事実、ジプシーたちは東から西へ旅を続け、通り過ぎた国々の文化を借用しながら

他の文化にも影響を与えてきた。それは、西域からシルクロードを経て唐にもたらされた楽器や楽舞が雅楽として中国化したかたちで統合されたことから伺うことができる²²。つまり、アメリカの写真家メイヤーが「世界中の文化は互いに影響し合いながら存在する。文化は最初から交じり合いながら起こってきた産物であり、時間をかけて少しずつ混じり合っていく」²³と述べているように、同じ地域にある異文化がいつまでも“水と油”のように分かれたままではないのではなく互いに影響を与えながら変化の過程を経て存在してきたといえる。

ここで新しい文化が作り出される背景について考えてみたい。古い価値観にしばられない若者たちの間においては、既存の文化に対しても異なったものを組み合わせることなどが柔軟に試行され、今までは考えられなかったような新しい文化が現在も形成されつつある。そうした若者文化のキーワードに『リミックス (remix)』という概念がある。辞書ではこの『リミックス (remix)』という言葉は「レコード制作で、同じ素材を別ヴァージョンで新たにミックス・ダウンする場合の作業」や、「ミキシング (録音) し直す」「混ぜ直す」という意味があるが、簡単に言ってしまうとそれまで既成概念として異文化であったものを“混ぜる”ということである。例えば、「食べ物」の例としてイチゴと大福をミックスした「イチゴ大福」は有名であるが、その他にも「チョコレート+とんかつ」「納豆+カレー」「ツナ・マヨネーズ+たい焼き」などの今までの古い食文化の価値観では考えられなかった組み合わせが若者の文化で発展している。

音楽の世界でも、このように元からあった伝統の文化に他の文化が組み合わされた形で変容された結果、新しい文化が生まれている。管弦楽の曲でみるならば、アンドレ・ジョリヴェの『ピアノ協奏曲』やオリヴィエ・メシアン『天国の色彩』などの作品の中に、木琴、センセロス (半音階の鍵)、タムタムなどの楽器が多用されているように、ガムラン音楽が取り入れられている²⁴。また、ジャズの音楽はその特徴である“アドリブ”で他の演奏者がしていることを感じとらなければいけない点において、他者の音楽との関連を重視しながら演奏者が本来もっている音楽性が活かされるものとなるだけに、「演奏者の生まれ育った文化を曲の中に溶け込ませる」という点で興味深いものがある。アフリカのタンザニアではヨーロッパや日本からたくさんのエレキ楽器やスピーカー・アンプなどが輸入され、都市部にたくさんの“アフリカン・ジャズ”と呼ばれる新しい音楽が生まれている²⁵。また、フリージャズ系のグループ「マサダ」のリーダー John Zohnは、ジャズの音楽に彼が育ったユダヤ的な文化であるヘブライ旋法をもとに即興演奏を加えて作曲をしている²⁶。ベトナムではサキソフーン奏者のクエン・ヴァン・ミンが「若者と一緒に新しい形のジャズを作りたい。民族音楽を外国音楽の長所を生かしてベトナム独自のジャズを上げたい」²⁷と民族楽器ケーンなども使用しながら、ベトナム音楽の音階を流用し、ベトナムの民族音楽をジャズに乗せる取り組みをしている。

このように変化の影には、新しいものを取り入れようとする先駆的な人々がいたからこそ、その時代・地域に受け入れられる文化として発展してきた、ということがいえるだろう。例えば、パキスタン系英国人のギタリスト、アジズ・イブラヒムが「7歳のころからエレクトリック

クギターによるインド音楽に挑戦]²⁸したり、タンザニアのキンブトゥは、タンザニアの伝統的な音楽にレゲエ、ルンバの要素をミックスさせ“カルチュラル・ロック”という新しいスタイルで演奏をし、人気を博している²⁹。ロシアでは民族音楽風な曲にシンセサイザーを加えたものなどがあり、小室等が「ヨーロッパ・アメリカ風であるにも関わらず、よく聴くとどこか違って、ロシアン・ポップスとしか言いようがない」³⁰と述べているように、新しい音楽の中にも地域文化の特色が音になって表現されているものがある。また、身近なところではSax奏者の梅津和時氏の率いる「キキ・バンド」が北海道の無形文化財「松前神楽」の宮司と共演を行い、伝統芸能と現代音楽の「かがり火コンサート」を実施している³¹。

伝統の音楽に興味をもってもらうための手段として、音楽家たちはこのようなさまざまな工夫を施しているのだろう。そして、こうした“新しい試み”から、今までには考えられなかった表現の方法が編み出されたり、異文化の音楽との共演がされたりするなかで、その楽器、さらには伝統音楽そのものの可能性が広がってきたことは間違いない。大林太良が「あらゆる文化は、たとえどんな未開な文化であっても絶え間ない変化の状態にある。そしてその文化変化を引き起こす主なものは、新しい文化の追加である。新しい文化要素の追加は発明あるいは伝播によっておこる。」³²と述べているように、新しい要素が今まで存在していた文化の中に融合され、時代と共に新しい文化がつくられてきた。今まで全く異なっていたと思われてきた文化同士が、これからも新しい世代の人々によって結びつけられることは想像に難くない。このような観点からも、異なる文化に影響を与える音楽のもつ力は異文化の交流活動において有効である、ということがいえる。

Ⅲ 異文化交流を進めていく際の留意点

前章でも述べたように、長い歴史の過程を経て異なる文化に住むもの同士が交流を行ってきた結果、今日の音楽文化が存在しているということが出来る。しかしながら、A.ストーが「音楽は文化に根ざした産物である」³³と異なる文化の音楽を鑑賞することの難しさを述べているように、それぞれ別々の環境に生まれ育ち基本的な価値観も違う者同士がお互いの音楽について理解を深めるにはいくつかの工夫が必要である。そこで次には、幾つかの文献を通して考察した「異文化交流を進めていく際の留意点」をまとめてみた。

1. 音の背景を知る

まず第一に、異文化の理解をする際には「その文化に流れているところの背景を知る」ということが大切である。それぞれの文化に生まれ育ってきた我々は知らず知らずのうちに自文化の影響を受けており、武満徹が「われわれの耳は知らず知らずのうちに素直じゃなくなっている。様々な価値観、概念によって汚されている。」³⁴と述べているように、生まれた時からの感覚や価値観によって好悪や優劣を判断してしまう危険性がある。つまり、認知する我々はもうすでにそれまでの自分の生きてきた文化の色眼鏡を通して異文化のものを見聞きしている

ため、音楽を発信する異文化の人々の意図とは違って来る可能性が大きい。そこで姜信子が「音楽が国境を越えるためには、その音と結びついたイメージなり、世界観なり物語が必要」³⁵と述べているように、音楽の表現している背景を若干でも知る事によって、その作品の本当の理解や感動はより深くなるといえる。実際、コンサートのパンフレットやCDのアルバムには必ずといってよいほどその作品や演奏者に関しての解説が載っているが、そうすることで聴取者のその音楽に対する理解を深め、より深い音楽体験が生み出されることを狙っているといってもよい。平野敬一は『マザー・ゲースのうた』のCDの解説の中で「自分の想像力を自由にはばたかせるだけでマザー・ゲースの世界に没入できる人には、くだけしい解説は不要かもしれません。しかし背景がわかれば、それだけ唄の味わいが深くなる」³⁶と述べているが、異なる文化背景をもつ音楽ほどその作品なり演奏の説明が補足されることによって、音楽の楽しみ方はもっと深められるに違いない。

2. 複数の言語、他の表現媒体の活用

前述の「背景を知る」ということを念頭に入れた上で、実際の交流を進める際に「言葉」が果たす役割は重要である。“アジア・フォーカス福岡映画祭”ではその第一回目において流されたインドの作品をブラジルの映画批評家が見て感嘆し、地元のサンパウロで上映することになった。この背景としてこの批評家は「これらの作品を理解できたのは、それらのプリントに日本語字幕とともに英語字幕も入れていたから」³⁷ということを述べている。この例からわかるように、国際化が進む社会においては、自国だけで通用する言葉の表記だけではその説明としては不完全である。外国で演奏会に行きたくとも、何が行われているのかわからなければ足も遠のくだろうし、パンフレットや演奏会の説明の中で言葉がわからなければその背景をつかむことができず、面白さも半減してしまうことは想像に難くない。榎田勝利は「世界に開かれたまちづくりのため」³⁸の10の提言の中で、『日本語と英語の併記による情報サービス』を提言しているが、世界中からの来客を迎える観光・娯楽施設では英語と他の外国語での表記が当たり前のように、迎え入れる側に理解できる言語での表記サービスが必要である。音楽においても、藤原歌劇団で日本初の字幕スーパーを導入したことが画期的な成功をもたらし、「日本オペラの水準を引き上げた」³⁹と言われているように、交流を進める際にはその背景に流れていることを理解するためには説明の中で複数の言語（特に世界でも共通語となりつつある英語）を用いる必要がでてくる。

さらに付け加えるならば、音楽は、バレエ・演劇・映画などのときのように、その背景を他の表現媒体によって注釈を加えることも効果的である。多くの場合、音楽はその登場人物やできごと、また映像などを引き立たせるために使われるのであるが、その逆に音楽だけで描写しようとするよりも映像や舞踊、遊びなど他の表現方法も駆使することにより、その文化がもつ味わいを深くすることとなるだろう。フランスと日本で活躍するアコーディオン奏者Coba（小林靖宏）はいろいろな表現媒体を協同「Collaboration（協同・協力）」させる試みをしてい

るが、彼は新潟で料理、音楽、パフォーマンスなどを協同させたイベント「テクノ・キャバレー」に取り組む果敢な挑戦をしている⁴⁰。このように、他の表現媒体を活用することによって音楽の表現は活かされ、異文化との交流に役立たせることができるだろう。

3. 積極的な姿勢

我々はよく風評などからその人間の善悪などを色眼鏡で判断してしまうときがあるが、付き合ってみると誤解をしていたことに気がつくことがある。E. ボールディングは「(平和の文化とは)“差異”に心から耳を傾け、他人を尊重し、人間としての兄弟・姉妹愛に徹する生き方、といえる」⁴¹と述べている。実際のところ、自分の信念としているものが脅かされることを恐れたり、プライドを守るためか、自分とは異なる考え方に対しては“認めたがらない”傾向の人もいることは事実である。しかし、受け入れる姿勢がなければ、異文化にまたがる問題の本質をつかむことはできないだろう。

このことから、われわれは自分たちの価値観とは違う文化に対して積極的に取り組もうとする姿勢が求められている、といえる。そして今日まで伝統ある音楽に対して様々な音楽家はその伝統の形態を変えた表現を試みられてきた。日本では“箏”の世界で有名な宮城道雄が、彼の代表作ともいえる『春の海』でそれまでの伝統的な奏法に“西洋の和音”や“ハーモニクス”“ピツィカート”の奏法などを組み込だことは有名である⁴²。“三味線”の世界では二代目高橋竹山が寺山修司の詩に沖縄の音階を使った津軽三味線の曲を発表したり、韓国のパンソリを三味線の演奏に起用したり、ソウルやブルースの分野の人たちとのセッションをやったりと、三味線の可能性を広げる挑戦を続けている⁴³。また、国際交流基金の取り組み『ASIAN FANTASY ORCHESTRA』では、伝統音楽、民謡、ジャズ、ポップス、西洋クラシックなどさまざまな音楽ジャンル・文化的背景を持つ音楽家たちが、多くの音楽的な違いを越え、アジアの地域が有する伝統・民族曲などの特徴的な音楽的要素を織り込んで新たな音楽を創り上げる公演を行った⁴⁴。1998年「国際音楽の日」のイベントでは日韓合同制作のオペラ「超越」が公演されたが、ここではエレクトーンアンサンブルによる伴奏という特徴があった⁴⁵。クラシック界の立場から言えばこうした取り組みは邪道に思われるかもしれない。しかし、韓国でのこうした電子楽器とオペラの関わりは、「オペラ公演は多額の費用がかかり財政上不可能である」という必然性から新しい音楽表現として活用が始められたという経過があり、オペラの盛んな韓国で庶民が身近に取り組めることを考えるならば、こうした斬新なアイデアは他の地域でも大いに用られるべきだろう。

このような新しい音楽への挑戦は、今までの狭い文化の中だけのものから積極的に他の文化の要素を取り入れることによって発展してきたものということができる。塚田健一は「今日台頭している文化の新しい傾向を、わたくしたちは『古い伝統』『正当な伝統』に対して『擬似の伝統』として排除するのではなく、むしろ積極的に考察のなかに取り入れていかねばならないだろう」⁴⁶と述べているが、そうした異文化に対する寛容性は異文化の理解には欠かせないもの

である。つまり、自分たちの文化とは全く異なると思われる音楽であったとしても「そこから何かを学び取ろう」「新しい表現を工夫してみよう」という積極的な姿勢を我々は交流する際にもち続けるべきである。

4. 性急な判断を避ける

異文化を理解するには性急な判断をさける必要がある。なぜなら、それぞれの人によってもその捉えかたが違うことは勿論、同じ人でも日によって反応が違う時があるからだ。それは精神や身体の状態によるものであったり、周りから受ける情報や影響が日々入れ替わったりしているから、子どもの頃嫌いだったものがいつのまにか好きになっていることがあるように、趣味やものの見方なども年と共に変わっている。つまり、“好み”や“価値観”は時の移り変わりと共に変化をしているから、ある音楽に対しての評価が永久に変わらないということはない、ということが言える。筆者は以前、雅楽の響きに対して「気味の悪い音楽」としての認識しかなかったのであるが、実際自分が教員になり音楽の授業を教える頃になって雅楽の調べを何度となく聞くうちにだんだんとその響きの味わいに馴染んできたという経験がある。日本に住んでいる私でさえこうであるから普段接していない異文化のものであるならば、その理解には時間を要することは大いに考えられる。

B.リーマーは性急な判断の危険性について、「急仕立ての意見は『急仕立ての知覚』と『急仕立ての反応』のなせるわざである。一つの芸術作品の複雑な内容に、即座に、深い、高度の知覚と反応をすることのできる人は、まずいない。」⁴⁷と述べている。異文化の音楽を聴いたときに、まず起きるのは自分の価値観から起きる“好み”や“判断”であろう。われわれはとかく自分と違ったものに対して、“好き”とか“嫌い”の判断を早急に下してしまい、次からの行動（音楽であれば“聴く”か“聴かない”か）を決定してしまいがちである。しかし、先にも述べた通り、判断は時と共に変わる可能性がある。であるから、一時的な好き嫌いの感情に左右されて聴くことを止めてしまうのでは、相手の文化を本当に理解した事にはならない。町恵理子は『非言語コミュニケーションの成功の秘訣』⁴⁸として「解決を急がない」ということを挙げているが、一時の判断からその文化について「嫌い」「理解できない」としてしまうことは避けなければならない。であるから、異文化を理解するには時間をかけて慎重に行うことが必要である。

5. よい音楽にふれる

ある事柄に興味をもつ場合、よい材料を与えることは重要である。一流のシェフの作った料理はおいしいが、それは材料を厳選し、手間をかけ、長年の経験から得た料理の知恵を駆使して真剣に作っているからである。しかし、同じ料理であったとしても素人が適当につくったものであれば、それを「おいしい」とは感じるだろうか。ましてや普段食べたことがないものであれば「もう二度と食べたくない」と思うかもしれない。ここで一つの例えとして、私が米国ラスベガス滞在時「第2回Japan Festival」というイベントにボランティアとして参加した時の

ことを挙げたい。その舞台では“日本の文化紹介”という名目で箏の演奏発表がされていたが、その時の演奏は調律が狂っており、箏の演奏が好きであった私も嫌気が差すほどひどい演奏だったことを覚えている。「よい音をたくさん経験した子は、よい音を聴くのが好きになる」⁴⁹といわれているが、このことから、耳慣れない文化を経験する機会の少ない異文化の人々との交流を進めていく際には良質の音楽が提供されることが望まれるだろう。小澤征爾が「伝統にはいい伝統と悪い伝統がある。…中略…その悪い方を外国人が来て習ったら、これは惨めな話だよ」⁵⁰と述べているように、異文化の音楽に触れるときには“よい音楽”に触れてこそ本当の味わう楽しみが感じられる、といえるだろう。

さて、そこで“よい音楽”について考えてみたい。音楽の要素である「リズム」「音程」「ハーモニー」が洗練されているに越したことはない。しかし、そう考えると洗練されたという点ではテンポも音程も正確で間違いのない“コンピューターのような”音楽が一番である。しかし、音楽で人々は「表現」し、それを聴く人々が「共有」する芸術である。機械のような音楽では果たしてそこに人の心を揺さぶる感動はどれだけあるだろうか。以前私が知的障害児の特殊学級に実習に行ったときに、お別れの場面で児童の一人が実習生のために歌を歌ってくれたことがあった。音楽的に言えば上手といえるものではなかったのだが、私はその歌に感動し、いつまでも心の中にそのメロディーが響いていたことを思い出す。つまり、中国の歌手崔岩光が「感動させられるかどうかは自分の力にかかっています。自分が感動できなければ、聴衆を感動させることはできません。」⁵¹と述べているように、演奏者の魂から溢れるような演奏が相手に感動を与える、といつてよい。前段と矛盾するような論になってしまうが、“よい音楽”といつても音楽のレベルの良し悪しに関わらず、気持ちの入った音楽が聴衆を感動させる場合がある。宇野功芳によれば、ある大学のオーケストラは以前8割が初心者で弦楽器のグループは惨たんたる状況であったという。しかし初心者が多い昔は「もう全員が音楽をしたくてうずうずしており、情熱の火で舞台が火の海になるほど感動的な演奏をしていた」⁵²が、現在では技術が上がった代りに燃えなくなってしまう、ということである。つまり、いくら技術があつてもそこに情熱や気持ちがあれば感動は伝わらない、といえるのではないだろうか。

これらことから、心から感動したものはいつまでも思い出として心に残るのであるから、真剣な練習を通して“よい音楽”をつくり出すための努力は惜しむべきではない。たとえ音楽には素人であってもその真剣さが音になって表れ“素晴らしい音楽”を奏することは可能であると信じたい。そうして感動したり感動してもらつた経験をする中で、その音楽が“よい思い出”として心に残り、異文化の音楽に対して「また聴きたい」という気持ちが起きたり、関心が高まるということがいえるだろう。

6. 実際の体験をする

音楽を通じた交流を行っていく際には、「実際の体験をする機会をなるべく設ける」ことも重要な点である。小泉文夫が「頭でわかるのではなくて、本当は身体でわからなければだめなん

ですから、一番いいのは自分でやってみる事です。自分で弾いたり、吹いたり、鳴らしたりしていれば、民俗音楽の良さ、すばらしさ、楽しさがわかってくる。』⁵³と述べているように、馴染みの薄い音楽を理解するにはとにかく体験してみることが大切で、それによって理解の糸口をつかみ理解を深めることができるといえる。筆者の体験になるが、大学でオーケストラにはいって自分が演奏するまで管弦楽の演奏は「眠くなる音楽」であり、社会人になってからジャズのビッグバンドで演奏する前まではジャズという音楽は「わけがわからず、面白くない音楽」という感想をもっていた。しかし、実際にその音楽を演奏する機会をもつことによって次第にその音楽に興味をもちながらその音楽の良さを体得していき、今ではそれらが自分の好きなジャンルに入っている。このことから、河口道朗が「音楽の教養がある人」⁵⁴の中で挙げているように、実際に伝統楽器にふれたり、地元の身近な行事に演奏者として加わったりするなどの体験をすることが、本当の音楽の理解を深めることになるだろう。つまり、石井敏が「文化間の相互理解を深めるためには、認知的局面に加えて感情的局面と行動的局面も不可欠で、三局面がいわば立体的に作用し合うことが重要である。とくに異文化理解教育の一環としての異文化コミュニケーション訓練では、知的理解に加えて感情と行動の面の疑似体験が重要視される。』⁵⁵と述べているように、単に異文化の知識面での理解にとどまらない「実際の活動を通じた体験」が異文化との交流には必要である、といえる。

7. 一方通行から双方向へ

文化交流の活動の多くを振り返ってみると、どちらか一方の側が文化の紹介をし、それを聴くものが受身になってしまう例が多い。しかし、岡部朗一が「一方通行から相互主義へ、直流から交流へと対異文化姿勢を転換する必要性を明確に認識しなければならない」⁵⁶と示唆しているように、異文化の交流は一方の知識や演奏のみに終わってしまうのではなく相互のコミュニケーションがあって初めて深い理解となる。榎田勝利は「地域の人や親が心がけること」として、「子ども達は好奇心が旺盛であり、いろいろなことを親に質問したり、話を聞こうとする。その場合、無視したり、いいかげんな態度をとらず、親子が一緒に考えたり、調べたりする姿勢が子どもの国際性を育てることになる」⁵⁷と述べている。これは子どもを例にとった話であるが、異なる文化について疑問や興味をもっているものに対して、単なる画一的な文化の紹介に終始し観衆の反応を無視した活動になってしまうのであれば消化不良の部分が残ってしまうだろう。しかし、興味津津な子どもに親がわかるように説明してあげるように、交流の過程で興味をもったことへ反応が活かされる双方向の交流の機会がもてるならば、その文化に対する理解はより深められるに違いない。

それに加え、現在は情報化が発達しそれぞれが求めるものも多様化している時代である。日本IBMの金子章弘が「マルチメディアの時代にはこうしたガッチリと固めたシステムのなかでは情報がどんどん腐ってってしまう。したがって今後は改変しやすい柔らかなシステムをつくっていく必要があると思う。』⁵⁸と述べているように、これからは受けるものの立場に立った

情報の提供をしていく体制が求められている。つまり、その時々聴衆の感じるものや求めるものは人によって違っているのが普通であるから、その反応を見定めて柔軟に対応していくことが必要である。これを音楽の交流の場面で考えるならば、演奏の後にその曲や楽器についての質問を受けたり、観客に演奏を体験してもらったり、演奏者と一緒に演奏（または声を出したり身体を動かすこと）など共に行う活動を行い、それを聴くものの反応を見ながら曲や形態を変えたり、さらに補足的な説明をするといったフィードバックをすることが考えられる。以上のことから、多様化した情報の提供に 대응していくために文化の発信者は自分の文化に対する知識や技能を身につけるための研鑽を磨くことが求められる、といえる。それに加え、個人の力といっても微々たるものであるから、音楽をするものはそれぞれの専門分野に通じている人とのネットワークを広げていく努力が必要である。

Ⅳ おわりに

時を経る中でいろいろな文化が影響し合い、その文化混交の過程で人々は新たな出会いをし友情が育まれてきた。つまり、今後も更に多様化し新しい文化の興隆が進む社会では、これまでも述べたように「共通項を見つけ」、「違いから学び」、そして更には「新たな文化をつくりだす」という視点が求められている。異文化間の人々の軋轢が取り沙汰されている昨今、ストラヴィンスキーが「音楽の深遠な意味と本質的な目的は……交わりの状態、つまり仲間や至高の存在との結びつきを促進することにある」⁵⁹と述べているように、音楽が果たす役割の一つとして、「人間同士の結びつきを促進する」ことは重要なテーマである。音楽活動の上で大切なことにアンサンブル（合奏や合唱）があるが、ソロ（一人）での活動に対し、アンサンブルではお互いを理解しその主張を尊重しあうことや協調性を養うことで個の在り方と集団の在り方という社会性を伸ばすことができる。その上、異文化の人との交流においては、音楽の特性である「知的過程を通らずに直接情動に働きかける」⁶⁰部分を活かしながら相違点をプラスにしていく創造的な活動をしていくことが双方の人間交流に役立つことになる、と信ずるものである。『音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律』の第一条に「音楽文化が明るく豊かな国民生活の形成並びに国際相互理解及び国際文化交流の促進に大きく資する」とあるように、音楽は人を結びつけ交流する力をもっているといえるだろう。実際、意識する、しないに関わらず音楽を通じた異文化間の交流活動は世界中のいたるところで行われており、そこでは新たな友情やネットワークがつけられている。実際の活動には、多くのエネルギーを使うことになるわけであるが、そうした交流が内容の濃い充実した活動となるよう、具体的な事例を参考にしながら今後さらなる研究を進めていきたい。

Ⅴ 引用・参考文献

- 1 総務省ホームページ{ HYPERLINK "http://www.stat.go.jp/" ,http://www.stat.go.jp}統計局統計センター『第五十回日本統計年鑑』、2001

- 2 読売新聞『教育新世紀；調査』、2001. 8. 6日付朝刊
- 3 DeMusik Inter編『音の力』、インパクト出版会、1996、239p
- 4 総務庁行政監察局編『教育の国際化を目指して』、総務庁、1997、180p
- 5 NHK教育TV『スーパートーク：ハンチントン博士と語る21世紀文明のゆくえ』、1998放送
- 6 大林太良著『現代文化人類学 第2巻』、中山書店発行、1966、209p
- 7 江波戸明著『世界の音、民族の音』、青土社、1992、249p
- 8 秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌—文化・歴史・社会』、明石書店、1996、194p
- 9 みつとみ俊郎著『オーケストラとは何か』、新潮社、1992、20p
- 10 東京藝術大学音楽学部小泉文夫記念資料室ホームページ{HYPERLINK "http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/" http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/}『所蔵楽器目録：楽器分類』、2001
- 11 大島彰著『心の月は沈まない』、河出書房新社、1995、213p
- 12 張前著「異文化交流と中国音楽の近代化」、『異文化交流と近代化』京都国際セミナー1996委員会、1996、249p
- 13 森亘著『東京大学公開講座46：異文化への理解』、東京大学出版会、1988、327p
- 14 アンソニー・ストー著（佐藤由紀・大沢忠雄・黒川孝文訳）『音楽する精神』、白揚社、1994、52p
- 15 小泉文夫著『音楽の根源にあるもの』、平凡社、1994、206p
- 16 遠藤克弥著『国際化理解と教育』、川島書店、1998、31p
- 17 Yuko Ito著「People 1—Yoshida Brothers」、『MINI WORLD』、ミニワールド、7p
- 18 「The Interview」、『新風8月号vol.116』、佐賀市文化会館発行、1999、9p
- 19 中嶋恒雄著「音楽教育国際フォーラム報告」、『CMC第7号』、音楽文化創造、1997、22p
- 20 前掲書6、243p
- 21 読売新聞『2000年代を読む⑩』、1999. 1. 14日付朝刊
- 22 山口修・斎藤和枝編『比較文化論—異文化の理解—』、世界思想者、1995、97p
- 23 NHK教育TV『未来潮流：文化は混血する』、1998. 12. 21放送
- 24 みつとみ俊郎著『オーケストラとは何か』、新潮社、1992、200p
- 25 前掲書7、209p
- 26 DeMusik Inter編『音の力』、インパクト出版会、1996、22p
- 27 NHK神戸制作『新アジア発見：ジャズの心を伝えたい』、1999. 5. 23放送
- 28 朝日新聞『アジア編第2部：越境するカルチャー5、ハイブリッド音楽』、1999. 4. 28日付朝刊
- 29 白石顕二著『アフリカ音楽の想像力』、勁草書房、1993、196p
- 30 小室等著『小室等的 {音楽的生活} 事典』、晶文社、1989、114p
- 31 読売新聞『北海道のページ』、2001. 7. 25日付朝刊

- 32 前掲書 6、207p
- 33 前掲書14、84p
- 34 清水勝編『人生読本—音楽』、河出書房、1983、55p
- 35 姜信子著『日韓音楽ノート』、岩波書店、1998、11p
- 36 KING RECORDS『谷川俊太郎訳詩によるマザー・グースのうた』CD、KICG147
- 37 「アジア・フォーカス福岡映画祭」、『国際交流 第66号』、国際交流基金発行、1995、68p
- 38 榎田勝利著『21世紀は地球っ子の時代』、中央出版、1989、66p
- 39 下八川共祐著「生涯学習としてのオペラ活動」、『CMC創刊号』、音楽文化創造、1998、57p
- 40 毎日放送『情熱大陸；欲望のアコーディオン』、1999.8.1放送
- 41 聖教新聞『平和の文化めざして』1999.5.25日付
- 42 山口修・斎藤和枝編『比較文化論—異文化の理解—』、世界思想者、1995、93p
- 43 「クローズアップ」、『第3文明10月号』、第三文明社、1998、8p
- 44 国際交流基金ホームページ{ [HYPERLINK "http://www.jpf.go.jp/j/art_j/perform_j/topic_j/afo/"](http://www.jpf.go.jp/j/art_j/perform_j/topic_j/afo/) ,http://www.jpf.go.jp/j/art_j/perform_j/topic_j/afo/} 国際交流基金舞台芸術交流、『Asian Fantasy Orchestra Asian Tour1998：エピソード』、2001
- 45 名和聖著「オペラ“超越”と日韓音楽文化交流」、『CMC11号』、音楽文化創造、1998
- 46 柘植元一・塚田健一編『はじめての世界音楽』、音楽之友社、1999、12p
- 47 ベネット・リーマー著（丸山忠璋訳）『音楽教育の哲学』、音楽之友社、1987、146p
- 48 八代京子、町恵理子、小泉浩子、磯貝友子共著『異文化トレーニング—ボーダレス社会を生きる』、三修社、1998、153p
- 49 田中教育研究所編『幼児指導の心理講座；5.音楽リズム』、明治図書、1998、15p
- 50 小澤征爾・武満徹著『音楽』、新潮社、1984、115p
- 51 聖教新聞『サンデー・インタビュー』、1999.2.3日付
- 52 宇野功芳著『音楽の友4月号』、音楽の友社、1998、72p
- 53 小泉文夫著『音楽の根源にあるもの』、平凡社、1994、212p
- 54 河口道朗著『音楽における国際理解教育』、エムティ出版、1994、15p
- 55 岡部朗一監修『異文化コミュニケーション』、有斐閣、1996、257p
- 56 前掲書55、268p
- 57 榎田勝利著『21世紀は地球っ子の時代』、中央出版、1989、181p
- 58 榎エディト編『マルチメディアの仕事』、竹村出版、1995、78p
- 59 前掲書14、1994、
- 60 レスリー・バント著『音楽療法—言葉を越えた対話—』、稲田雅美訳、ミネルヴァ書房、1997、490p